

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されて
いる事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed
with this Office

出 願 年 月 日
Date of Application:

2000年 8月29日

出 願 番 号
Application Number:

特願2000-258354

出 願 人
Applicant(s):

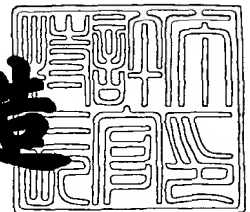
日東電工株式会社



2001年 5月31日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

及 川 耕 造



出証番号 出証特2001-3050184

【書類名】 特許願

【整理番号】 00NP474

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 G02B 5/00

【発明者】

 【住所又は居所】 大阪府茨木市下穂積 1 丁目 1 番 2 号日東電工株式会社内

 【氏名】 梅本 清司

【発明者】

 【住所又は居所】 大阪府茨木市下穂積 1 丁目 1 番 2 号日東電工株式会社内

 【氏名】 矢野 周治

【特許出願人】

 【識別番号】 000003964

 【氏名又は名称】 日東電工株式会社

 【代表者】 山本 英樹

【代理人】

 【識別番号】 100088007

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 藤本 勉

【手数料の表示】

 【予納台帳番号】 052386

 【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

 【物件名】 明細書 1

 【物件名】 図面 1

 【物件名】 要約書 1

 【包括委任状番号】 9006504

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 導光板、面光源装置及び反射型液晶表示装置

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 入射側面からの入射光を上面に形成した光出射手段を介して下面より出射する板状体の下面に、その板状体よりも屈折率が低い接着層を介して表面に微細凹凸を有する光拡散層を接着してなることを特徴とする導光板。

【請求項 2】 請求項 1 において、光拡散層が透明フィルムに微細凹凸層を設けたものよりなる導光板。

【請求項 3】 請求項 1 又は 2 において、光拡散層がその微細凹凸面上に反射防止層を有するものである導光板。

【請求項 4】 請求項 1 ～ 3 において、板状体の下面と入射側面の両基準平面に対する垂直面内において、前記下面からの出射光の最大強度方向が下面の基準平面に対する法線に対して 30 度以内にある導光板。

【請求項 5】 請求項 1 ～ 4 において、板状体の上面に形成した光出射手段が下面の基準平面に対する傾斜角が 35 ～ 48 度の光路変換面を具備する断面略三角形の凸凹の複数からなる導光板。

【請求項 6】 請求項 1 ～ 5 において、板状体の上面に形成した光出射手段が光路変換面と長辺面からなるプリズム状の凸凹の $50\mu\text{m} \sim 1.5\text{mm}$ ピッチの繰返し構造よりなり、かつ前記光路変換面が下面の基準平面に対し 35 ～ 48 度の傾斜角で入射側面側よりその対向端側に下り傾斜し当該基準平面に対する投影幅が $40\mu\text{m}$ 以下の斜面からなると共に、前記長辺面が当該基準平面に対し 0 ～ 10 度の傾斜角範囲にあってその全体の角度差が 5 度以内であり、最寄り辺の傾斜角差が 1 度以内で、しかも当該基準平面に対する投影面積が光路変換面のその 5 倍以上の斜面からなる導光板。

【請求項 7】 請求項 5 又は 6 において、光出射手段を形成する凸凹の稜線が入射側面の基準平面に対し ± 30 度以内の範囲にある導光板。

【請求項 8】 請求項 1 ～ 7 において、光拡散層を板状体の下面に接着する接着層の屈折率がその板状体よりも 0.01 ～ 0.2 低いものであり、かつ光拡散層の屈折率がその接着層よりも高いものである導光板。

【請求項 9】 請求項 1～8 において、光拡散層を板状体の下面に接着する接着層の屈折率が 1.47 以下である導光板。

【請求項 10】 請求項 1～9 において、光拡散層を板状体の下面に接着する接着層が粘着層である導光板。

【請求項 11】 請求項 1～10 に記載の導光板における 1 又は 2 以上の側面に光源を配置してなることを特徴とする面光源装置。

【請求項 12】 請求項 11 に記載の面光源装置の光出射側に、反射層を有する液晶セルを配置してなることを特徴とする反射型液晶表示装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の技術分野】

本発明は、光の利用効率に優れ明るくて良表示品位の反射型液晶表示装置を形成しうる導光板及びそれを用いた面光源装置に関する。

【0002】

【発明の背景】

従来、暗部等での視認を可能とするサイドライト型導光板よりなる面光源装置を視認側に有するフロントライト式の反射型液晶表示装置における当該導光板の下面に、接着層を介して表面微細凹凸の光拡散層を付設したものが知られていた（特開平 11-281980 号公報）。斯かる光拡散層は、出射光（表示光）と導光板の下面や液晶セルによる反射光等とが干渉してモアレ（縞状の明暗）が発生することを拡散反射や透過時の散乱等で防止することや、入射外光が導光板下面で反射されて像として映り込むことの防止などを目的とする。前記のモアレは、視認位置で明暗の縞模様が移動して視覚がガラガラとし視認性を著しく低下させる。しかしながら従来の反射型液晶表示装置にあっては光拡散層の付加で前記の利点に対し、点灯モードにおける輝度が光源から遠離るほど大きく低下して明暗のバラツキが大きくなる欠点のある問題点があった。

【0003】

【発明の技術的課題】

本発明は、光拡散層を付加して外光反射光による像の映り込みやモアレの発生

を防止しつつ点灯モード時の輝度のバラツキを抑制し、明るくて表示品位に優れるフロントライト式の反射型液晶表示装置を形成しうる導光板や面光源装置の開発を課題とする。

【0004】

【課題の解決手段】

本発明は、入射側面からの入射光を上面に形成した光出射手段を介して下面より出射する板状体の下面に、その板状体よりも屈折率が低い接着層を介して表面に微細凹凸を有する光拡散層を接着してなることを特徴とする導光板、及びその導光板における1又は2以上の側面に光源を配置してなることを特徴とする面光源装置、並びにその面光源装置の光出射側に、反射層を有する液晶セルを配置してなることを特徴とする反射型液晶表示装置を提供するものである。

【0005】

【発明の効果】

本発明によれば、光拡散層を板状体よりも屈折率の低い接着層を介し接着したことにより、点灯モードによる輝度のバラツキを大幅に抑制することができる。これは従来方式による問題を究明したことに基づく。すなわち従来では、板状体と光拡散層との界面における反射を抑制することが反射損の防止で輝度の向上に有利であり、従って板状体と光拡散層を屈折率が可及的に近い接着層で接着して各界面での屈折率差を小さくするほど反射損を抑制できて輝度の向上に有利であると考えられていた。

【0006】

しかしながら前記の場合には図6に折れ線矢印 $\beta 0$ 、 $\beta 0'$ 、 $\beta 1'$ 、 $\beta 1''$ で例示した如く、板状体1の側面より入射した光 $\beta 0$ やその伝送光が界面屈折率差の低下で接着層15を透過して光拡散層12に入射しやすくなり、その入射光は微細凹凸面と空気との界面で散乱 $\beta 1'$ されて導光板の上面や下面からの漏れ光 $\beta 0'$ 、 $\beta 1''$ が多量に発生しその下面漏れ光 $\beta 0'$ の液晶セル20への入射角が大きいこともあって、それら上下面の漏れ光が液晶セルの照明に寄与しないと共に板状体の後方に伝送される光を減少させる。また前記の上面漏れ光 $\beta 1''$ は、表示光のコントラストを低下させる原因となりやすい。さらに前記の光拡散

層による散乱は、光出射手段等を介して照明光ないし表示光となる出射光 $\beta 1$ 、 $\beta 2$ 、 $\beta 3$ 、 $\beta 4$ の方向にもバラツキを生じさせて集光性を低下させ、光分布の拡大で視認方向での表示を暗くする。

【0007】

一方、図5に折れ線矢印 $\alpha 0$ 、 $\alpha 1$ で例示した如く本発明によれば入射光 $\alpha 0$ は、接着層13との屈折率差で全反射されやすく、またその全反射は後方に伝送される接着層への入射角の大きい光ほど受けやすいため光拡散層12に入射しにくくて後方への光の伝送効率が向上する。また光出射手段等を介した出射光 $\alpha 1$ 、 $\alpha 2$ 、 $\alpha 3$ 、 $\alpha 4$ の方向もバラツキにくくて集光性が向上し狭い光分布で輝度が向上して視認方向の表示を明るくする。その結果、輝度のバラツキが低下して導光板出射面での輝度の均一性が向上し、それにより光の利用効率に優れ明るさとその均一性に優れるフロントライトシステム用の面光源装置が得られ、モアレや外光反射光による像の映り込みが生じにくくて点灯・外光両モードで明るさや表示品位に優れるフロントライト式の反射型液晶表示装置を得ることができる。

【0008】

【発明の実施形態】

本発明による導光板は、入射側面からの入射光を上面に形成した光出射手段を介して下面より出射する板状体の下面に、その板状体よりも屈折率が低い接着層を介して表面に微細凹凸を有する光拡散層を接着してなるものである。その例を図1、図2に示した。1が板状体で、Aがその上面に形成した光出射手段、12が光拡散層、13が接着層である。なお12aは透明フィルム、12bは微細凹凸層、14は反射防止層である。また矢印が入射側面からの入射光の伝送方向（後方）である。

【0009】

板状体としては、入射側面からの入射光を上面に形成した光出射手段を介して下面より出射する適宜なものを用いる。一般には図1、2の例の如く上面、それに対向する下面及び上下面間の側面からなる入射側面を有する形態の板状体が用いられる。板状体は、図例の如く同厚型のものであってもよいし、入射側面に対向する対向端の厚さを入射側面のそれよりも薄くした楔形等の形態を有するも

のであってもよい。対向端の薄型化は、軽量化や入射側面からの入射光ないしその伝送光の上面に形成した光出射手段への入射効率の向上などの点より有利である。

【 0 0 1 0 】

板状体の上面に形成する光出射手段は、上記した出射特性を示す適宜なものにて形成することができる。入射側面からの入射光を上面の光出射手段を介して下面より指向性よく効率的に出射させ、かつ下面からの入射光を上面より散乱なく効率よく透過させるもの、就中、正面ないしその近傍方向での良視認性などの点より図 1 に例示した如く入射側面より入射した光ないしその伝送光が下面より出射した場合に、その出射光の最大強度 K を示す方向 θ が下面の基準平面に対する法線 H に対して 30 度以内にあるものが好ましい。

【 0 0 1 1 】

また前記において上面からの漏れ光と下面からの出射光による表示像との重複によるコントラストの低下を防止する点よりは、前記の法線 H に対して 30 度以内の方向における上面からの漏れ光の最大強度が下面における前記最大強度 K の $1/5$ 以下のものが好ましい。前記方向の上面からの漏れ光は、最大強度 K を示す下面からの出射光の反射層を介した反射光と重複しやすく、前記の上面漏れ光／下面出射光の最大強度比が大きいと表示像の強さを相対的に減殺しやすく、コントラストを低下させやすい。

【 0 0 1 2 】

反射型液晶表示装置とした場合の明るさやコントラスト等の表示品位の向上などの点よりさらに好ましい板状体は、入射側面と下面の両基準平面に対する垂直面内（図上の断面）において前記の θ が 28 度以内、就中 25 度以内、特に 20 度以内にあるものである。また前記の法線 H を基準に入射側面の側を負方向としたとき最大強度 K の方向と同じ角度 θ の上面からの漏れ光の強度 L が当該最大強度 K の $1/10$ 以下、就中 $1/15$ 以下、特に $1/20$ 以下であるものである。当該漏れ光は、最大強度 K を示す光の正反射方向と重複するため前記 L/K の値が大きいと表示像の強さを相対的に減殺しコントラストを低下させる。

【 0 0 1 3 】

上記した最大強度K方向や最大強度K／漏れ光強度L比等の特性を達成する点などより好ましい光出射手段は、図1、2の例の如く入射側面（矢印元）と対面する光路変換面A1を有する光出射手段A、就中、下面の基準平面に対する傾斜角が35～48度の光路変換面A1を具備する凸凹の複数、特にその凸凹の繰返し構造からなる光出射手段Aが好ましい。バックライト方式で用いるドット等の散乱型の光出射手段では前記した出射光の指向性に乏しいことや、それを介して表示像を視認する際に光を散乱させて像形を崩すことなどよりフロントライト方式には不向きである。

【0014】

前記凸凹の繰返し構造は、等辺面からなる凸部又は凹部にても形成しうるが、光の利用効率や前記した下面よりの出射光を反射層で反転させて上面より正面（垂直）方向に指向性よく出射させる点などより特に好ましい凸凹構造は、図1の例の如き下面の基準平面に対する傾斜角が35～48度（ $\theta 1$ ）で入射側面（矢印元）の側よりその対向端の側に下り傾斜する光路変換面A1を具備する断面略三角形の凸凹を所定のピッチで形成し、そのピッチ間に板状体1の上面に基づく当該傾斜角が0～10度の平坦面1aを配置した繰返し構造や、図2の例の如き前記光路変換面A1と当該傾斜角が0～10度の長辺面A2（ $\theta 2$ ）からなるプリズム状凸凹の繰返し構造よりなるものである。

【0015】

なお前記の凸凹は、突起（凸）か溝（凹）かによる。光路変換面A1を傷付き難くして耐久性の向上を図る点よりは溝構造による光出射手段が好ましい。その凸凹において前記の光路変換面A1は、側面よりの入射光の内その面に入射する光を反射して下面に供給する役割をする。

【0016】

前記の場合にその傾斜角 $\theta 1$ を35～48度とすることにより、図5に例示の折れ線矢印 $\alpha 0 \sim 4$ の如く伝送光 $\alpha 1$ を下面に対し垂直性よく反射し、上記した最大強度Kの方向が法線Hに対し30度以内の下面出射光 $\alpha 2$ を得て、反射層21'を介して正面への指向性に優れる出射光 $\alpha 3$ 、4（照明光、表示光）を効率よく得ることができ、明るい表示を達成することができる。

【0017】

正面への指向性等の点より光路変換面の好ましい傾斜角 $\theta 1$ は、板状体内部を伝送される光のスネルの法則による屈折に基づく全反射条件が例えば屈折率1.5では ± 41.8 度であることなどを考慮して $38 \sim 45$ 度、就中 $40 \sim 44$ である。なお全反射条件を満足せずに光路変換面を透過して漏れ光となる一部の光は、正面方向に対し 60 度以上の大きい角度で出射して正面方向近傍の視認に影響しにくい、傾斜角 $\theta 1$ が 48 度を超えると上面よりの漏れ光が増大しやすくなり光利用効率の点で不利となる。

【0018】

一方、光路変換面A1間の平坦面1aや長辺面A2は、それに入射する伝送光を反射して光路変換面に供給すると共に、図5の例の如く光路変換面による反射光 $\alpha 2$ を反射層21'を介し反転($\alpha 3$)させて上面より透過させること($\alpha 4$)、及び反射モードでの外光を入射させてそれを反射層21'を介し反射させて上面より透過させることを目的とする。かかる点より下面の基準平面に対する平坦面1aの角度又は長辺面A2の傾斜角 $\theta 2$ は、 $0 \sim 10$ 度であることが好ましい。

【0019】

長辺面等の当該傾斜角 $\theta 2$ は 0 度(水平面)であってもよいが、 0 度超とすることで長辺面等に入射した伝送光を反射して光路変換面に供給する際に伝送光を平行光化することができ、光路変換面を介した反射光の指向性を高めることができ表示に有利となる。

【0020】

一方、当該傾斜角 $\theta 2$ 等が 10 度を超えると長辺面等への入射率が低下して対向端側への光供給が不足し発光が不均一化しやすくなり、屈折による光路変更も大きくなって正面方向の光量が低下し表示に不利となる。また板状体の断面形状においても対向端側の薄型化が困難となり、光出射手段への入射光量も減少して発光効率も低下しやすくなる。

【0021】

伝送光の平行光化による出射光の集光化や正面方向の光量増加、漏れ光の抑制

等の前記性能などの点より長辺面等の好ましい傾斜角は、8度以下、就中5度以下である。上記の如く光路変換面と平坦面ないし長辺面の当該傾斜角を調節することにより、出射光に指向性をもたせることができ、それにより下面に対して垂直方向ないしそれに近い角度で光を出射させることが可能になる。

【0022】

板状体の長辺面を介した表示像の視認性などの点より好ましい長辺面は、その傾斜角 $\theta 2$ の角度差を板状体の全体で5度以内、就中4度以内、特に3度以内としたものであり、最寄りの長辺面間における傾斜角 $\theta 2$ の差を1度以内、就中0.3度以内、特に0.1度以内としたものである。これにより透過する長辺面の傾斜角 $\theta 2$ の相違等により表示像が受ける影響を抑制することができる。長辺面による透過角度の偏向が場所によって大きく相違すると不自然な表示像となり、特に近接画素の近傍における透過像の偏向差が大きいと著しく不自然な表示像となりやすい。

【0023】

前記した傾斜角 $\theta 2$ の角度差は、長辺面の傾斜角が上記した10度以下にあることを前提とする。すなわち斯かる小さい傾斜角 $\theta 2$ として長辺面透過時の屈折による表示像の偏向を抑制して許容値内とすることを前提とするものであり、これは観察点を垂直方向近傍に設定して最適化した液晶表示装置の最適視認方向を変化させないことを目的とする。

【0024】

表示像が偏向されると最適視認方向が垂直方向近傍からズレると共に、表示像の偏向が大きいと導光板上面からの漏れ光の出射方向に近付いてコントラストの低下などその影響を受けやすくなる場合もある。なお長辺面等の傾斜角 $\theta 2$ を10度以下とする条件には、透過光の分散等の影響も無視できる程度のものとするなど含まれている。

【0025】

また明るい表示像を得る点よりは、外光の入射効率に優れ、液晶セルによる表示像の透過光率ないし出射効率に優れるものが好ましい。かかる点より、下面の基準平面に対する平坦面ないし長辺面の投影面積が光路変換面のその5倍以上

、就中 1 0 倍以上、特に 1 5 倍以上の断面略三角形ないしプリズム状の凸凹とすることが好ましい。これにより液晶セルによる表示像の大部分を平坦面ないし長辺面を介して透過させることができる。

【 0 0 2 6 】

なお液晶セルによる表示像の透過に際して、光路変換面に入射した表示像は入射側面側に反射されて上面より出射しないか、下面に対する法線を基準に長辺面等を透過した表示像とは反端側の大きく異なる方向に偏向されて出射し、長辺面等を介した表示像に殆ど影響を及ぼさない。よって表示光の透過不足で不自然な表示となることを防止する点などより画素と光路変換面がオーバーラップする面積を小さくして長辺面等を介した十分な光透過率を確保することが好ましい。

【 0 0 2 7 】

一般に液晶セルの画素ピッチは 1 0 0 ~ 3 0 0 μm であることを鑑みた場合、前記の点より光路変換面は、下面の基準平面に対する投影幅に基づいて 4 0 μm 以下となるように形成されていることが好ましい。なお光路変換面の投影幅が小さくなるほどその形成に高度な技術が必要となり凸凹の頂部が一定以上の曲率半径からなる丸みをもつと散乱効果が現れて表示像の乱れの原因となりやすく、また一般に蛍光管のコヒーレント長が 2 0 μm 程度とされている点などよりも光路変換面の投影幅が小さくなると回折等による表示品位の低下原因となりやすいことなどより、特に好ましい光路変換面の投影幅は 1 ~ 2 0 μm 、就中 5 ~ 1 5 μm である。

【 0 0 2 8 】

前記の点より光路変換面の間隔は大きいことが好ましいが、一方で光路変換面は上記したように側面入射光の実質的な出射機能部分であるから、その間隔が広すぎると点灯時の照明が疎となってやはり不自然な表示となる場合があり、それを鑑みた場合、断面略三角形ないしプリズム状の凸凹の繰返しピッチは、5 0 μm ~ 1 . 5 mm とすることが好ましい。なおピッチは、一定であってもよいし、例えばランダムピッチや所定数のピッチ単位をランダム又は規則的に組合せたものなどの如く不規則であってもよい。

【 0 0 2 9 】

凸凹からなる光出射手段の場合、液晶セルの画素と干渉してモアレを生じる場合がある。モアレの防止は、凸凹のピッチ調節で行いうるが、上記したように凸凹のピッチには好ましい範囲がある。従ってそのピッチ範囲でモアレが生じる場合の解決策が問題となる。

【 0 0 3 0 】

本発明においては画素に対して凸凹を交差状態で配列しうるように凸凹を入射側面の基準平面に対し傾斜状態に形成してモアレを防止する方式が好ましい。その場合、傾斜角が大きすぎると光路変換面等を介した反射に偏向を生じて出射光の方向に大きな偏りが発生し、導光板の光伝送方向における発光強度の異方性が大きくなって光利用効率も低下し、表示品位の低下原因となりやすい。

【 0 0 3 1 】

前記の点より入射側面の基準平面に対する凸凹の配列方向、すなわち凸凹の稜線方向の傾斜角は、 ± 30 度以内、就中 ± 28 度以内、特に ± 25 度以内とすることが好ましい。なお、 \pm の符号は入射側面を基準とした傾斜の方向を意味する。液晶セルの解像度が低くてモアレを生じない場合やモアレを無視しうる場合には、凸凹の配列方向は入射側面に平行なほど好ましい。

【 0 0 3 2 】

板状体は、上記したように適宜な形態とすることができる。楔形等とする場合にもその形状は適宜に決定でき、直線面や曲面などの適宜な面形状とすることができる。また光出射手段を形成する光路変換面やプリズム状凸凹も直線面や屈折面や湾曲面等の適宜な面形態に形成されていてよい。

【 0 0 3 3 】

さらに凸凹は、ピッチに加えて形状等も異なる凸凹の組合せからなってもよい。加えて凸凹は、稜線が連続した一連の凸部又は凹部として形成されていてもよいし、所定の間隔を有して稜線方向に不連続に配列した断続的な凸部又は凹部として形成されていてもよい。

【 0 0 3 4 】

板状体における下面や入射側面の形状については、特に限定はなく、適宜に決定してよい。一般には可及的に平滑でフラットな下面及びその下面に対して垂直

な入射側面とされる。入射側面については、例えば湾曲凹形などの光源の外周等に応じた形状として、入射光率の向上をはることもできる。さらに光源との間に介在する導入部を有する入射側面構造などとすることもできその導入部は、光源などに応じて適宜な形状とすることができる。

【 0 0 3 5 】

板状体は、光源の波長域に応じそれに透明性を示す適宜な材料にて形成しうる。ちなみに可視光域では、例えばアクリル系樹脂やポリカーボネート系樹脂、ノルボルネン系樹脂やエポキシ系樹脂等で代表される透明樹脂やガラスなどがあげられる。複屈折を示さないか、複屈折の小さい材料で形成した板状体が好ましく用いられる。

【 0 0 3 6 】

板状体は、切削法にても形成でき、適宜な方法で形成することができる。量産性等の点より好ましい製造方法としては、熱可塑性樹脂を所定の形状を形成しうる金型に加熱下に押付て形状を転写する方法、加熱溶融させた熱可塑性樹脂あるいは熱や溶媒を介して流動化させた樹脂を所定の形状に成形しうる金型に充填する方法、熱や紫外線ないし放射線等で重合処理しうる液状樹脂を所定の形状を形成しうる型に充填ないし流延して重合処理する方法などがあげられる。

【 0 0 3 7 】

なお板状体は、例えば光の伝送を担う導光部にプリズム状凸凹等の光出射手段（上面）を形成したシートを接着したものの如く、同種又は異種の材料からなる部品の積層体などとして形成されていてもよく、1種の材料による一体的単層物として形成されている必要はない。

【 0 0 3 8 】

板状体の厚さは、使用目的による導光板のサイズや光源の大きさなどにより適宜に決定することができる。液晶表示装置等の形成に用いる場合の一般的な厚さは、その入射側面に基づき10mm以下、就中0.1～5mm、特に0.3～3mmである。また透明性による明るい表示や鮮明な表示像を達成する点などより好ましい板状体は、上下面方向の入射光、特に下面から上面への垂直入射光の全光線透過率が90%以上、就中92%以上、特に95%以上で、ヘイズが30%以下、

就中 15% 以下、特に 10% 以下のものである。

【0039】

図 1、2 の例の如く板状体 1 の下面には、その板状体よりも屈折率の低い接着層 13 を介して表面に微細凹凸を有する光拡散層 12 が接着され、これにより導光板が形成される。光拡散層としては表面に微細凹凸を有する適宜なものを用いる。ちなみにその例としては、低屈折率の透明樹脂中に高屈折率の透明粒子を分散させた表面微細凹凸の塗布硬化層や気泡を分散させた透明樹脂による表面微細凹凸の塗布硬化層、基材表面を溶媒を介し膨潤させてクレイズを発生させ表面微細凹凸構造としたものや不規則な凹凸面を有する透明樹脂層、あるいはそれらの層を透明な支持基材、就中、透明フィルムに設けたものなどがあげられる。

【0040】

前記の不規則な凹凸面は、基材やその上に設けた透明樹脂の塗布層の表面に粗面化处理したロールや金型等の粗面形状を転写する機械的方式又は／及び化学的处理方式などの適宜な方式で形成することができる。前記の透明粒子には例えば平均粒径が 0.5～30 μm のシリカ、アルミナ、チタニア、ジルコニア、酸化錫、酸化インジウム、酸化カドミウム、酸化アンチモン等の導電性のこともある無機系粒子や、架橋又は未架橋ポリマー等の有機系粒子などの適宜なものを 1 種又は 2 種以上用いる。なお光拡散層は、図 1 の例の如く単層物として形成することもできるし、図 2 の例の如く透明フィルム等の透明な支持基材 12a に表面微細凹凸層 12b を設けたものなどの複層物として形成することもできる。なお光拡散層は、表示像を乱さない程度の弱い拡散能を示すものが好ましい。

【0041】

板状体 1 の下面に対する光拡散層 12 の接着は、その板状体よりも屈折率が低い接着層 13 を介して行う。これにより入射側面からの入射光ないしその伝送光を板状体の後方に効率よく伝送することができる。その伝送を達成する全反射効率及びそれら界面での反射の抑制による外光等の入射効率などの点より、板状体の屈折率より 0.01 以上、就中 0.02～0.2、特に 0.05～0.15 低い屈折率の接着層が好ましい。また板状体の形成材料とバランスさせる実用性等の点よりは屈折率が 1.47 以下の接着層が好ましい。

【 0 0 4 2 】

前記の接着層を形成する接着剤には適宜なものを用いることができ、その種類については前記屈折率の点を除き特に限定はない。接着作業の簡便性等の点よりは粘着層が好ましく用いうる。なお板状体 1 の下面に接着層 1 3 を介して接着する光拡散層は、その屈折率が当該接着層 1 3 の屈折率よりも高いもの、就中 0.2 以下、特に 0.01 ~ 0.15 高いものが外光等のそれら界面での反射の抑制による入射効率などの点より好ましい。

【 0 0 4 3 】

図 2 に例示の如く光拡散層 1 2 の外側の微細凹凸面には必要に応じて反射防止層 1 4 を設けることができる。反射防止層の付加は、入射外光の導光板下面での反射の抑制に有効であるが、その反射の抑制は伝送光を導光板内に閉じ込める点では不利に作用して輝度の向上に寄与しない。従って反射防止層は、前記した導光板下面での反射光による映り込みが強いとき、又は上面からの漏れ光として液晶セルによる表示像と重複し白呆けやコントラストの低下が強いときにその抑制を目的に付加することが好ましい。なお反射防止層は、干渉膜等の従来に準じたものとして適宜に形成することができる。

【 0 0 4 4 】

本発明による導光板によれば、上面及び下面からの入射光が下面又は上面より良好に透過し、それを用いて精度よく平行化された光を視認に有利な垂直性に優れる方向に出射し、光源からの光を効率よく利用して明るさに優れる面光源装置、さらには明るくて見やすく低消費電力性に優れる反射型液晶表示装置などの種々の装置を形成することができる。

【 0 0 4 5 】

図 3 に本発明による導光板を有する面光源装置 1 0 を例示した。面光源装置は、例えば図例の如く導光板における板状体 1 の入射側面に光源 2 を配置することにより形成でき、サイドライト型のフロントライト等として好ましく用いうる。前記の光源としては適宜なものを用いうる。一般には例えば（冷，熱）陰極管等の線状光源、発光ダイオード等の点光源やそれを線状や面状等に配列したアレイ体、あるいは点光源を一定又は不定間隔の線状発光状態に変換する装置を用いた

光源などが好ましく用いうる。低消費電力性や耐久性等の点よりは、冷陰極管が特に好ましい。光源は、板状体の 1 又は 2 以上の側面に配置することができる。

【 0 0 4 6 】

面光源装置の形成に際しては、必要に応じて図 3 の如く光源 2 からの発散光を板状体 1 の入射側面に導くために光源を包囲する光源ホルダ 3 などの適宜な補助手段を配置した組合せ体とすることもできる。光源ホルダとしては、高反射率金属薄膜を付設した樹脂シートや金属箔などが一般に用いられる。光源ホルダを板状体の端部に接着剤等を介して接着する場合には、その接着部分については光出射手段の形成を省略することもできる。

【 0 0 4 7 】

上記のように本発明による面光源装置は、光の利用効率に優れて明るくて垂直性に優れる光を提供し、大面積化等も容易であることより反射型液晶表示装置等におけるフロントライトなどとして種々の装置に好ましく適用でき、明るくて見やすく低消費電力の反射型液晶表示装置等を得ることができる。フロントライト式の反射型液晶表示装置は、面光源装置の光出射側に、従って板状体下面側の光拡散層を介して、反射層を有する液晶セルを配置することより形成でき、その例を図 4、5 に示した。10 が面光源装置であり、20 が反射層を有する液晶セルを具備する液晶表示パネルである。22 が液晶層で、23、23'、23'' が液晶を挟持するセル基板であり、それらが液晶セルを形成している。また 21 が反射層、21' が電極兼用の反射層である。なお 24 は偏光板、25 は光拡散層である。

【 0 0 4 8 】

反射型液晶表示装置は一般に、電極を具備して液晶シャッタとして機能する液晶セルとそれに付随の駆動装置、偏光板、フロントライト、反射層及び必要に応じての補償用位相差板や光拡散層等の構成部品を適宜に組立てることなどにより形成される。本発明においては、上記した面光源装置を用いる点を除いて特に限定はなく、図例の如く従来に準じて形成することができる。なお図例では透明電極等の電極の記入を省略している。

【 0 0 4 9 】

従って用いる液晶セルについては特に限定はなく例えば液晶の配向形態に基づく場合、TN液晶セルやSTN液晶セル、垂直配向セルやHANセル、OCBセルの如きツイスト系や非ツイスト系、ゲストホスト系や強誘電性液晶系の液晶セルなどの適宜なものを用いうる。また液晶の駆動方式についても特に限定はなく例えばアクティブマトリクス方式やパッシブマトリクス方式などの適宜な駆動方式であってよい。さらにセル基板や電極は、照明光や表示光を透過させる必要がない位置では、透明基板や透明電極である必要はなく、不透明体にて形成することもできる。

【 0 0 5 0 】

反射型液晶表示装置では反射層21、21'の配置が必須であるが、その配置位置については適宜に決定でき例えば図4に例示の如く液晶セルの外側に設けることもできるし、図5に例示の如く液晶セルの内側に設けることもできる。反射層は、例えばアルミニウムや銀、金や銅やクロム等の高反射率金属の粉末をバインダ樹脂中に含有する塗工層や蒸着方式等による金属薄膜の付設層、その塗工層や付設層を基材で支持した反射シート、金属箔などの従来に準じた適宜な反射層として形成することができる。なお図5の如く液晶セルの内部に反射層21'を設ける場合、その反射層は、前記の高反射率金属等の高導電性材料にて電極を兼ねるものとして形成することもできるし、透明電極等と併設することもでき、透明電極にて形成することもできる。

【 0 0 5 1 】

表示光の制御を目的とした偏光板としては適宜なものを用いることができ、図例の如く液晶セルの片側又は両側に配置することができる。ちなみにその偏光板の例としてはポリビニルアルコール系フィルムや部分ホルマール化ポリビニルアルコール系フィルム、エチレン・酢酸ビニル共重合体系部分ケン化フィルムの如き親水性高分子フィルムにヨウ素や二色性染料等の二色性物質を吸着させて延伸したフィルム、ポリビニルアルコールの脱水処理物やポリ塩化ビニルの脱塩酸処理物の如きポリエン配向フィルムなどの偏光フィルムがあげられる。また前記偏光フィルムの片面又は両面に耐水性等の保護目的で樹脂の塗布層やフィルムのラミネート層等からなる透明保護層を設けた偏光板もあげられる。さらに液晶ポリ

マーや液晶含有のポリマーからなる偏光層を有する偏光板などもあげられる。

【0052】

一方、液晶表示パネルに必要な応じて設ける光拡散層は、明暗ムラの防止による明るさの均等化や隣接光線の混交によるモアレの低減などを目的に設けられる。その光拡散層としては、上記で例示したものなどの適宜なものを用いることができ、粘着層に透明粒子を分散させてなる接着層を兼ねる光拡散層として形成することもできる。光拡散層は、液晶表示パネルの適宜な位置に1層又は2層以上を配置することができる。

【0053】

他方、上記した補償用位相差板は、複屈折の波長依存性などを補償して視認性を向上させることなどを目的とし、視認側又は／及び背面側の偏光板と液晶セルの間等に必要に応じて配置される。補償用の位相差板としては、波長域などに応じて適宜なものを用いることができ、1層又は2層以上の位相差層の重畳層として形成されていてもよい。位相差板は、各種の樹脂からなる延伸フィルムや液晶ポリマーの配向層を有するものなどの適宜なものを用いる。延伸フィルムは、自由端や固定端による一軸延伸、二軸延伸や厚さ方向にも分子配向させる延伸などの各種の方式で延伸処理したものであってよい。なお反射型液晶表示装置の形成に際しては、その他の例えばアンチグレア層などの適宜な光学素子を適宜に配置することもできる。

【0054】

本発明による反射型液晶表示装置の視認は、面光源装置、特に上記したようにその板状体の平坦面ないし長辺面の透過光を介して行われる。ちなみに図5に例示の液晶セル内に反射層21'を設けたものの場合の視認では、面光源装置の点灯モードにおいて板状体1の下面より出射した光 α 2が偏光板24や液晶層22等を経由して反射層21'を介し反射され(α 3)、液晶層や偏光板等を逆経路して板状体1に至り、長辺面A2を透過した表示光 α 4が視認される。その場合、上面よりの強い漏れ光は液晶セルに対して垂直な正面方向とは角度が大きくズレた方向に出射し、正面方向に出射する漏れ光は弱く、それに光拡散層による寄与もあって長辺面を介して正面方向の近傍で表示品位に優れる表示像を視認する

ことができる。

【0055】

一方、面光源装置が非点灯の外光モードの場合においても、板状体1の上面の長辺面A2より入射した光が光拡散層や偏光板、液晶層や反射層等を前記に準じ透過・逆経路して板状体1に至り、長辺面を透過した表示像が正面方向の近傍で板状体による乱れ等が少ない表示品位に優れる状態で視認することができる。なお面光源装置の点灯・消灯は適宜な方式にて行うことができる。

【0056】

本発明において、上記した面光源装置や液晶表示装置を形成する液晶セルや偏光板等の光学素子ないし部品は、全体的又は部分的に積層一体化されて固着されていてもよいし、分離容易な状態に配置されていてもよい。界面反射の抑制によるコントラストの低下防止などの点よりは固着状態にあることが好ましい。その固着密着処理には、粘着剤等の適宜な透明接着剤を用いることができ、その透明接着層に上記した透明粒子等を含有させて光拡散機能を示す接着層などとすることもできる。

【0057】

【実施例】

参考例1

予め所定形状に加工した真鍮の表面をダイヤモンドバイトにて切削し上面形成用の中子を作製してそれを金型中に設置してその金型を100℃に加温し、それに熔融ポリメチルメタクリレート（屈折率1.50）を充填して光出射手段を有する板状体を形成した。その板状体は、幅60mm、奥行42mm、入射側面の厚さ1.0mm、対向端の厚さ0.6mmであり、上下面が平坦でその上面に入射側面に平行な頂角が70℃で傾斜角42.5度の光路変換面を具備する断面三角形の連続溝を240μmのピッチで有してその溝間に前記上面に基づく平坦面を有し、光路変換面の下面に対する投影幅が10～15μmで入射側面より遠離るほど大きくなり、平坦面／光路変換面の下面に対する投影面積比が15／1以上のものであった。なお断面三角形の連続溝は、入射側面より2mm離れた位置より形成した。

【 0 0 5 8 】

参考例 2

参考例 1 に準じた方法で、幅 6 0 mm、奥行 4 2 mm、入射側面の厚さ 1. 0 mm、対向端の厚さ 0. 6 mm であり、上下面が平坦でその上面に入射側面に平行なプリズム状の連続溝を 2 1 0 μ m のピッチで隣接に有し、光路変換面の傾斜角が 4 2. 5 度で、長辺面の傾斜角が 1. 8 ~ 3. 3 度の範囲で変化し、最寄り長辺面の傾斜角変化が 0. 1 度以内であり、光路変換面の下面に対する投影幅が 1 0 ~ 1 5 μ m で入射側面より遠離るほど大きくなり、長辺面／光路変換面の下面に対する投影面積比が 1 3 / 1 以上の板状体を得た。

【 0 0 5 9 】

実施例 1

紫外線硬化型ウレタン樹脂（屈折率 1. 5 1）にシリカ微粒子を分散させて透明な変性ポリエステルフィル（屈折率 1. 5 1）の片面に塗布し、紫外線照射で硬化処理して表面が微細凹凸構造の層を付設して光拡散シートを形成し、その表面微細凹凸層を有しない面に屈折率 1. 4 7 のアクリル系粘着層を設けてその粘着層を介し参考例 1 で得た板状体の下面に接着して導光板を得た後、その板状体の入射側面に冷陰極管を配置し銀蒸着を施したポリエステルフィルムからなる光源ホルダにて包囲しその縁を板状体の上下端面に両面粘着テープで接着して固定し、面光源装置を得た。ついでその面光源装置の光拡散層側にノーマリーホワイトの反射型液晶表示パネルを配置して反射型液晶表示装置を得た。なお前記の面光源装置は、電源のオン／オフで点灯・消灯の切り替えを行うことができ、液晶表示装置は全画素をオン／オフさせる駆動式のものである。

【 0 0 6 0 】

実施例 2

参考例 1 で得た板状体に代えて、参考例 2 で得た板状体を用いたほかは実施例 1 に準じて導光板、面光源装置及び反射型液晶表示装置を得た。

【 0 0 6 1 】

実施例 3

実施例 1 に準じた光拡散シートを屈折率 1. 4 6 のアクリル系粘着層を介し参

考例 2 で得た板状体の下面に接着して導光板を得、それを用いたほかは実施例 2 に準じて面光源装置及び反射型液晶表示装置を得た。

【 0 0 6 2 】

実施例 4

実施例 1 に準じた光拡散シートの光拡散層の外側に干渉性の真空蒸着膜からなる反射防止層を付加し、それを屈折率 1. 4 7 のアクリル系粘着層を介し参考例 2 で得た板状体の下面に接着して導光板を得、それを用いたほかは実施例 2 に準じて面光源装置及び反射型液晶表示装置を得た。

【 0 0 6 3 】

比較例 1

実施例 1 に準じた光拡散シートを屈折率 1. 5 2 のフェニル基置換型アクリル系粘着層を介し参考例 1 で得た板状体の下面に接着して導光板を得、それを用いたほかは実施例 1 に準じて面光源装置及び反射型液晶表示装置を得た。

【 0 0 6 4 】

比較例 2

参考例 1 で得た板状体に代えて、参考例 2 で得た板状体を用いたほかは比較例 1 に準じて導光板、面光源装置及び反射型液晶表示装置を得た。

【 0 0 6 5 】

比較例 3

実施例 1 に準じた光拡散シートの光拡散層の外側に干渉性の真空蒸着膜からなる反射防止層を付加し、それを比較例 1 に準じた屈折率 1. 5 2 のフェニル基置換型アクリル系粘着層を介し参考例 2 で得た板状体の下面に接着して導光板を得、それを用いたほかは実施例 2 に準じて面光源装置及び反射型液晶表示装置を得た。

【 0 0 6 6 】

評価試験

実施例、比較例で得た白状態の反射型液晶表示装置において面光源装置を点灯して点灯モードとし、導光板の幅方向の中心における入射側面とその対向端より各 1 0 mm の位置（入射部と後端部）及び中央部の位置での視認面における正面輝

度を輝度計（トプコン社製、BM-7）にて調べ、またそれらの平均値を求めた。その結果を下表に示した。

【0067】

	<u>正面輝度 (cd/m²)</u>			
	<u>入射部</u>	<u>中央部</u>	<u>後端部</u>	<u>平均値</u>
実施例 1	87	82	76	81.7
実施例 2	98	95	85	92.7
実施例 3	95	101	93	96.3
実施例 4	93	94	82	89.7
比較例 1	91	80	68	79.7
比較例 2	105	94	77	92.0
比較例 3	98	85	68	83.7

【0068】

表による実施例 1 と比較例 1、実施例 2、3 と比較例 2、実施例 4 と比較例 3 の対比より点灯モードによる表示面上での輝度のバラツキが少なくその均一性が大きく向上していること、及び平均値輝度に基づいて実施例が比較例よりも優れていることがわかる。また実施例の 2 と 3 の対比より光拡散層を接着する接着層と板状体の屈折率差を大きくするほど伝送光の全反射効果が増大して輝度の向上とそのバラツキの抑制に有効であることがわかる。さらに外観観察においても実施例では上面より大きい角度で出射する光が比較例よりも明らかに少なく、これは全反射効果の大きい実施例 3 で特に顕著であった。一方、外光による反射モードにおいても実施例では良好な表示品位が得られた。上記より実施例では点灯・反射両モードにおいて明るくてその均一性に優れる良好な表示品位のフロントライク反射型液晶表示装置の実現されていることがわかる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】

導光板の断面図

【図 2】

他の導光板の断面図

【図 3】

面光源装置の断面図

【図 4】

反射型液晶表示装置の断面図

【図 5】

実施例による光伝送状態を説明した他の反射型液晶表示装置の断面図

【図 6】

比較例による光伝送状態の説明図

【符号の説明】

1 : 板状体

1 a : 平坦面

A : 光出射手段

A 1 : 光路変換面 A 2 : 長辺面

1 2 : 光拡散層

1 2 a : 透明フィルム 1 2 b : 表面微細凹凸層

1 3 : 接着層

1 0 : 面光源装置

2 : 光源

2 0 : 反射型液晶表示パネル

2 1 : 反射層 2 1' : 電極兼用反射層

2 2 : 液晶層 2 4 : 偏光板

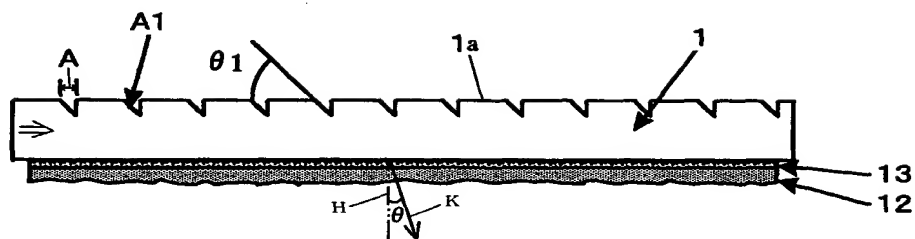
2 3、2 3'、2 3'' : セル基板

特許出願人 日東電工株式会社

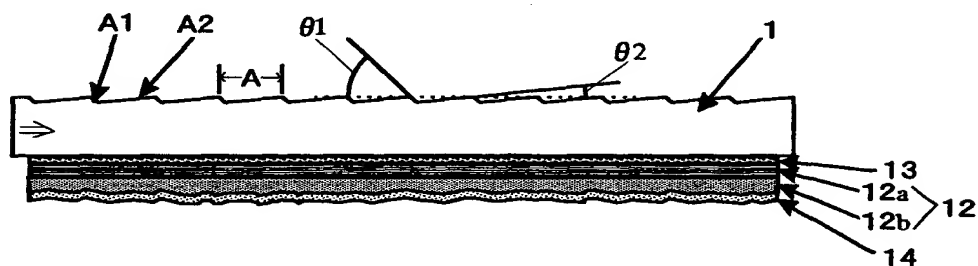
代 理 人 藤 本 勉

【書類名】 図面

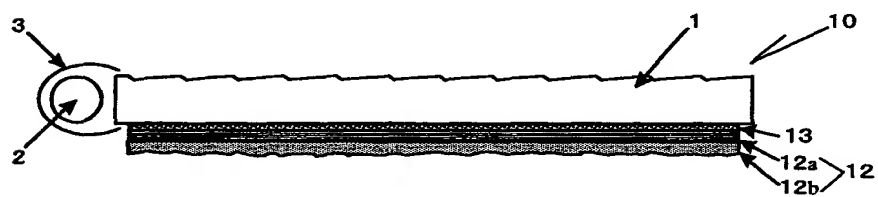
【図 1】



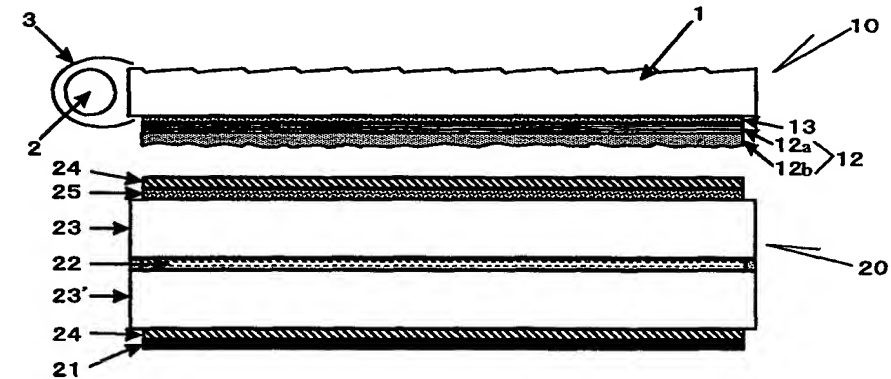
【図 2】



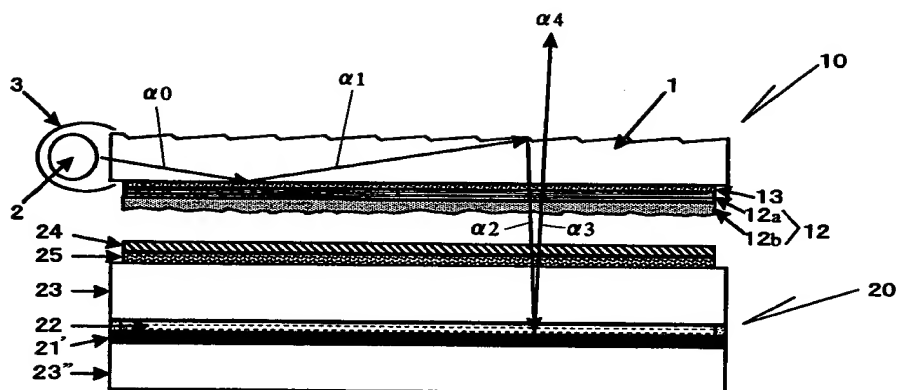
【図 3】



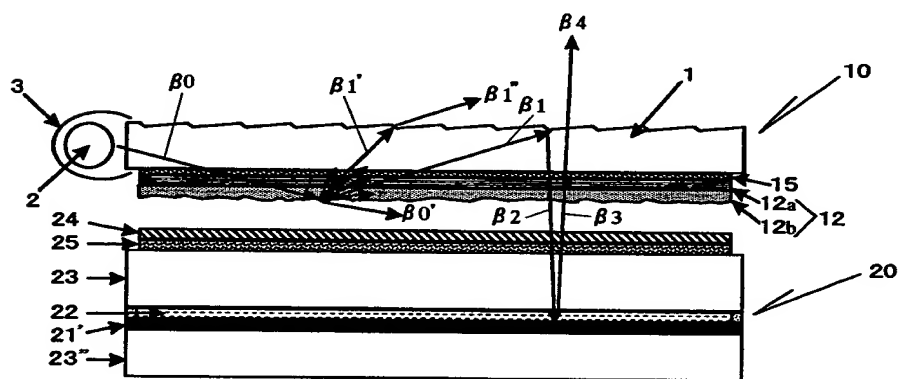
【図 4】



【図 5】



【図 6】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 光拡散層を付加して外光反射光による像の映り込みやモアレの発生を防止しつつ点灯モード時の輝度のバラツキを抑制し、明るくて表示品位に優れるフロントライト式の反射型液晶表示装置を形成しうる導光板や面光源装置の開発。

【解決手段】 入射側面からの入射光を上面に形成した光出射手段（A）を介して下面より出射する板状体（1）の下面に、その板状体よりも屈折率が低い接着層（13）を介して表面に微細凹凸を有する光拡散層（12）を接着してなる導光板及びその導光板における1又は2以上の側面に光源（2）を配置してなる面光源装置（10）、並びにその面光源装置の光出射側に、反射層（21）を有する液晶セルを配置してなる反射型液晶表示装置。

【選択図】 図5

特 2 0 0 0 - 2 5 8 3 5 4

認定・付加情報

特許出願の番号	特願 2 0 0 0 - 2 5 8 3 5 4
受付番号	5 0 0 0 1 0 9 3 1 2 3
書類名	特許願
担当官	第一担当上席 0 0 9 0
作成日	平成 1 2 年 8 月 3 0 日

<認定情報・付加情報>

【提出日】	平成12年 8月29日
-------	-------------

次頁無

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000003964]

1. 変更年月日 1990年 8月31日

[変更理由] 新規登録

住 所 大阪府茨木市下穂積1丁目1番2号

氏 名 日東電工株式会社